

機関番号：13601

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2009～2010

課題番号：21720067

研究課題名(和文) 昭和戦前期における日本文学英訳出版に関する研究

研究課題名(英文) The research on the publication of Japanese literature translated into English in Pre-war Showa era

研究代表者

山本 亮介 (YAMAMOTO RYOSUKE)

信州大学・教育学部・准教授

研究者番号：00339649

研究成果の概要(和文)：

1945年以前に出版された「北星堂」の刊行物を調査・収集し、その特徴や傾向について整理した。そのうち、昭和戦前期における日本近代文学の英訳刊行物(夏目漱石、谷崎潤一郎、芥川龍之介、菊池寛など)を取り上げ、翻訳出版の意図やその歴史的意義について考察した。研究をとおして、昭和戦前期の社会動向と複雑な関係を持ちながら、英語による日本文化・日本文学の対外紹介の試みが継続されたことが明らかになった。

研究成果の概要(英文)：

We made an investigation into the books which Hokuseido press published before 1945, then analyzed their features and tendencies. About English translations of Japanese modern literature published by Hokuseido in Pre-war Showa era, We inquired into the intention and historical significance. We proved the fact that an attempt of the introduction of Japanese culture and literature to abroad in English had been continued in complicated relation to the social situation in Pre-war Showa era.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	800,000	240,000	1,040,000
2010年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
年度			
総計	1,300,000	390,000	1,690,000

研究分野：日本近現代文学

科研費の分科・細目：文学・日本文学

キーワード：比較文学、出版メディア、翻訳、国際文化交流

1. 研究開始当初の背景

(1) 国内・国外の研究動向

① 日本文学の翻訳に関する研究

日本文学の翻訳文献情報は、はやくは沼澤龍雄『日本文学史表覧』(1934)から、戦後の日本ペンクラブ編“*Japanese Literature in European Languages*”(1961)、“*Japanese Literature in Foreign Languages*

1945-1995”(1997)、国際文化会館図書室編“*Modern Japanese Literature in Translation*”(1979)、さらには現在 Web 公開されている国際交流基金編「日本文学翻訳書目録」に至るまで、着実に積み重ねられてきた。

海外からの現代日本文化に対する関心の高まりや、近代の文化接触を対象とする研究

の進展を受け、過去になされた文学作品の翻訳紹介についても具体的な分析が求められている。たとえば最近、久保田裕子「日本近代文学の翻訳状況—翻訳テキストの目録から—」(2007)が整理したように、日本の現代小説の翻訳をめぐる国際研究とともに、国内および欧米・アジア各国で、過去の日本文学の翻訳紹介に関する研究が活発化している。

現在の課題として、昭和20年以前の翻訳活動については、散発的に言及されるものの、包括的な検証はなされていないと言える。特に昭和戦前・戦中期は、対外文化紹介が組織的に計画・実施された最初であり、当該研究領域の原点とするべき時期と考えられる。加えて、各国・各言語別で研究が展開している点、翻訳・出版に至る具体的プロセスの実証が欠落している点などが、課題として挙げられる。

②近代日本の国際文化交流に関する研究

昭和戦前・戦中期の対外文化紹介活動については、国際連盟や日本外務省ほか関係機関を対象とする研究によって、多くのことが明らかになっている。たとえば、海野芳郎『国際連盟と日本』(1972)、入江昭『権力政治を超えて』(1998)、芝崎厚士『近代日本と国際文化交流—国際文化振興会の創設と展開』(1999)などが、当時の国際情勢における文化交流の意義と問題点について分析している。特に文学面での交流活動を担ったのは、昭和10年創設の「日本ペン倶楽部」であったが、その活動実態については『日本ペンクラブ三十年史』(1967)、『日本ペンクラブ五十年史』(1987)で概略をつかむことができる。

現在の課題として、国際政治や国家機関などを中心とするマクロな考察において、個々の事象に関する具体的な分析や実質的な意義づけが抜け落ちることは否めない。国際情勢や政治戦略などの問題と、実際の紹介活動において生じた事柄を合わせて考察する必要がある。そのためにも、現場で翻訳企画に携わった組織や出版社、雑誌メディアに関する検討は不可欠となるが、ともに概略以上の研究はいまだなされていないと言える。

2. 研究の目的

近代日本文学の対外翻訳紹介に関する実証的、理論的分析を通して、近代の国際文化交流における達成と問題点の一端を明らかにするとともに、現代の日本文化紹介活動を歴史的に位置づけることが、研究の全体構想である。また、異文化交流の場において近代日本の文学表現を捉え直し、新たな作品研究の観点を創出する。こうした試みは、現在の国内・国外における日本文学翻訳の研究、および文化交流に関する学際的研究の基盤を

形成し、新たな論点を創出するものと位置づけられる。

具体的な目的として、昭和戦前・戦中期における近代日本文学の対外紹介活動を取り上げ、現代の国際文化交流の起源を提示する。翻訳出版物と関連資料の発掘調査、分析に基づいて、関係組織・出版社・翻訳者などの活動実態を把握し、当時の近代文学翻訳紹介が持つ意義と問題点を明らかにする。特に本研究では、英語書籍出版社「北星堂」が行った戦時下における出版活動の実態を解明し、その意味づけを図る。なお、研究対象とする「北星堂」は、日本文学出版交流センター『文学の翻訳出版』(2007)が示すように、戦前・戦後期に日本文学英訳出版点数第一位となっていた出版社である。極めて興味深い出版社と言えるが、現在までその研究はなされていない。

3. 研究の方法

出版社「北星堂」の戦時下における翻訳出版活動の実態を、図書館・資料館やインターネット等を利用した各種文献資料の調査・収集により明らかにする。また、翻訳文献の内容について、訳者による序文などを中心に分析し、翻訳出版の意図・方向づけやその同時代的意義を考察する。

4. 研究成果

本研究は、昭和戦前・戦中期における日本文学の英訳出版を取り上げ、現在へと続く〈国際文化交流〉の起源の一端を明らかにしようとするものである。具体的には、当時数多くの英語刊行物を送り出した書肆「北星堂」について、出版活動の実態を解明し、その同時代的な位置づけを試みた。

まず、複数の図書館を利用し、創立～1945年までの北星堂刊行物について調査を行った。なお調査対象には、同書肆刊行の日本語文献も含まれる。結果、200点を超える刊行物に直接当たり、それぞれについて、著者・翻訳者・内容・目次・序文・奥付などの諸情報を収集した。この資料調査によって、北星堂による昭和戦前期刊行物の大半を確認したことになる。これは、本研究の基礎資料となることはもちろん、戦前期日本における極めて特徴的な出版活動を取りまとめた作業として、意義あるものと考えられる。

続いて、調査、収集した「北星堂」の昭和戦前・戦中期刊行物をもとに、その出版活動の総体的特徴について検討・分析した。そこから、①北星堂が出版活動の基軸としていた刊行物、②時代背景の推移と英語(英訳)出版物の関係性、③日本紹介を中心とする外国人著者の著作物の特徴、④英訳出版に関与した翻訳者たちとその意識、などが明らかになってきた。また、本研究の主眼となる日本近

代文学の英訳出版としては、夏目漱石、谷崎潤一郎、芥川龍之介、菊池寛らの翻訳作品や、同時代短編小説の翻訳アンソロジーなどの存在が判明した。なお、こうした文学作品の英訳は、北星堂における日本文化紹介の一環としての位置づけを有すると考えられる。

そして、文学作品の翻訳出版に焦点を当て、同時代資料と合わせてその刊行経緯を探るとともに、「北星堂」出版活動におけるその位置づけ、および戦前期の対外文学紹介における意義を検証した。

なかでも、Glenn W. Shaw による一連の翻訳刊行物（倉田百三 ‘*The Priest and his disciples*’, 1922/菊池寛 ‘*Tōjārō’s love and four other plays*’, 1925/二葉亭四迷 ‘*Mediocrity*’, 1927/芥川龍之介 ‘*Tales grotesque and curious*’, 1930/山本有三 ‘*Three plays*’, 1935) を取り上げ、その作品選定と序文の内容から、対外文学紹介に関する意識の変遷をたどった。さらに、戦中期にかけて刊行された日本人翻訳者による英訳作品（谷崎潤一郎 ‘*Ashikari; and, the Story of Shunkin*’ (Roy Humpherson、沖田一訳), 1936/夏目漱石 ‘*Kokoro*’ (佐藤いね子訳), 1941/井伏鱒二 ‘*John Manjiro*’ (金子尚一訳), 1941/芥川龍之介 ‘*The three treasures and other stories for children*’ (佐々木高政訳), 1944) を分析し、「北星堂」による日本文化紹介の帰結、意義を確認した。

また、上記研究と間接的に関わる論文（昭和戦前期の出版文化言説に関する考察）を発表した。

以下、上記翻訳文献の序文等に記載された、日本文学の対外紹介に関わる内容の一部を挙げる。

谷崎潤一郎 ‘*Ashikari; and, the Story of Shunkin*’ (Roy Humpherson、沖田一訳、1936) の訳者による序文では、「多くの日本語を翻訳しないままにした理由は、ひとつに日本の外部では正確な対応物が存在しないものの名前であることもあるが、他方では物語に漂うエキゾチックな雰囲気を持維持するためもあった」との説明がある。また、続く作家略伝には、「谷崎の初期作品に流れる思想は、快楽主義的な唯美主義として語られてきた。これらの傾向の痕跡は近年の作品においても見られるが、時を経て豊かさが増し、かつ独自の境地に達した極めて個性的なスタイルへと融合している。そのスタイルは、文学的な〈純粹さ〉と西洋の影響から自由である点で、海外の読者に対する特別な魅力を持っている。」といったアピールが記されている。

井伏鱒二 ‘*John Manjiro*’ (金子尚一訳、1941) には、St. Paul’s University の Douglas Overton が序文を寄せ、「日本人学生のためのテキストとして強く勧められるだけでなく、大西洋の対岸に暮らす人々の関心

を引くに値するものである」と結んでいる。

芥川龍之介 ‘*The three treasures and other stories for children*’ (1944) は、奥付に昭和19年5月1日発行とある。収録されているのは、「三つの宝」「犬と笛」「蜘蛛の糸」「魔術」「アグニの神」「杜子春」の英訳である。上記の刊行日時を鑑みたとき、訳者佐々木高政の序文の内容は注目に値する。

当訳書の冒頭には、作者芥川に向けた公開書簡の形式で、佐々木の文章が掲げられている。文章中の重要箇所・内容は以下のとおりである。: 全く面識のない自分であるが、芥川氏に訳者としての立場を明らかにしようと、この文章を書いた。三年ほど前、アメリカと日本間の問題が前景化し、戦争の空気が漂いはじめたとき、あなた（芥川）の物語のいくつかを英語に訳すことを思いついた。おそらく無意識に、私は何かに没頭することで動揺を静めようと思ったのだ。(…)そこで、児童向けの作品をいくつか訳していたが、我が国とアメリカ・イギリスの間で戦争が勃発し、事態は変わってしまった。作品は仕上がりつつあった。私は新たな気力をもって、仕事にかかった。諸紙の「勝利」の見出しが、私を鼓舞した。そうしているうちに、戦争はすぐさま新聞紙上の何かではなくなり、友人たちが殺されたり、日増しに自分自身が召集される可能性が高まるというように、個人的な現実となってきた。(…)私の頭にはつねにこの翻訳のことがあり、何度も草稿を書き直した。それまでのところ、私はこの本の出版について全く楽観していて、完成したら当然のごとく刊行されると思っていた。しかしいまや、戦争のせいで本の出版は極めて難しくなってしまった。だが私は幸運にも、接触した最初の出版社に受け入れてもらい、また英訳出版の許可を願った芥川夫人は、こころよく賛同し、励ましをくれた。その直後、出版申請は公的に認められ、刊行に至った。

公開書簡に続いて、「To those who are going to read this book」として、さらに佐々木の文章が掲載されている。文章中の重要箇所・内容は以下のとおりである。: あなたは『千夜一夜物語』、アンデルセン童話、グリム童話、『ロビンソン・クルーソー』、『ガリバー旅行記』をもう読んでいると思います。もしどれも読んでいなかったら、手に入れて読んでください。それらはこれまで書かれた童話のうち最高のものばかりで、少年少女はみな読むべきでしょう。ただし、この本（芥川児童文学の英訳）を読んだとき、あなたは変わった印象を持つかもしれません。それは作者が日本人だからです。そして、もし先に挙げた本よりも面白いところが見つかったら、それはあなたが東洋人だからです。つまり、私たちはいわば同じ血が流れる兄弟で、

似たような考えや感じ方をするのはとても自然なことなのです。ここにある物語の道徳についてあれこれ言うような、うんざりさせることはやめましょう。これらの物語の作者だけでなく訳者も、本を読み終わったあなたに、もっと正直で、もっと勇敢で、もっと親切でいられるような力が新しく湧いてきたら、本当にうれしく思います。正直で、勇敢で、親切な人たちが増えれば増えるほど、私たちの世界はもっとよい場所になるでしょう。もし人々が、他の人たちの正直さと素晴らしさを信じて、お互い助け合い、一緒に働くならば、この世界はとても住み心地のよい場所になるはずで、後に続く者たちのために、あなたは世界をいまよりもっとよい場所にするよう持てる力を尽くさねばなりません。そして、いま起きているような惨たらしい戦争があなたの時代に再び起こらないように気をつけねばなりません。もしこの本が、そうした目標の助けに少しでもなれば、天国の芥川氏のまわりで平和の天使がダンスするでしょう。

アジア・太平洋戦争末期に印刷物として発表された反戦平和の言葉として、この一文の存在は銘記されるべきものと思われる。さまざまな評価が可能な内容と言えるが、昭和戦前期の国際文化交流、対外日本文化紹介の一帰結として極めて意義深い。

また、昭和戦前期の出版文化言説に関する考察の要旨は次のとおりである。1927年に発刊された岩波文庫は、新たな出版文化を象徴するものとなった。その企画編集に深く関わったのが、教養文化とモダニズム文化の両方を体現した新しい知識人三木清である。当時の三木の論文には、各時代・社会で共有された学問的意識を意味する「公共圏」の概念が繰り返し現われる。三木はそれをロゴス＝言葉の両義的価値づけから切り離そうとした。こうした操作は、教養文化を商品として流通させる三木の思想実践に深く関係している。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計1件)

①山本亮介、岩波文化人三木清の出発とその思想—出版・教養・公共圏—、「日本文学」、第58巻第11号、13-23頁、2009、査読有

6. 研究組織

(1) 研究代表者

山本 亮介 (YAMAMOTO RYOSUKE)

信州大学・教育学部・准教授

研究者番号：00339649